

# AG+のプロジェクトを通して見えた 「指導」と「評価」の一体化

岩佐淳子（シカゴ日本語学校補習校）

---

## 現場と理論の間で考えた「週1回」の授業の意味

アメリカの大学院で教育の理論を学びながら、日本語補習校で教え始めてから25年が経ちました。この25年間、私は教育の理論を研究するだけでなく、補習校の教室に立ち続け、子どもたちの学びの様子をじっくり観察してきました。

海外で暮らす子どもたちに日本語で勉強を教えるとき、「日本の学校と同じ教科書や教え方をそのまま使えばいい」と思われがちです。しかし、実際はそう簡単ではありません。「週に1回しか

授業がない」という特別な環境では、日本のやり方をそのまま使うのが難しいからです。

素晴らしい教育の理論や指導法を、限られた時間しかない実際の教室でどう活かすか。理想と現実の間に悩み続けた 25 年間とこの AG+プロジェクトで見えてきたのは、教え方だけではなく、評価のあり方が重要なのだということでした。

ただ「**2 倍のスピード**」で進めるだけではうまくいかない

日本の学校と補習校の一番大きな違いは、「授業が週に 1 回しかない」ことです。これは単に勉強する時間が少ないということだけではなく、毎週の学習がつながりにくくなるため、教え方の仕組みそのものを考え直す必要があるということです。

日本の教科書は、子どもたちが毎日学校に通って少しずつ知識を積み重ねる前提で作られています。そのため、週 1 回しかない補習校で「2 倍のスピード」で無理に教科書を進めようとすると、目標とやり方が合わなくなり、ついていけなくなってしまう。

「同じ山を登るにも、ゆっくり自分のペースで頂上に到達するのと、走って頂上まで登り切るのとでは、準備も装備も違ってくることは明らかです」

「毎日通う学校」がゆったり『歩く』登山なら、「週 1 回の補習校」は限られた時間で『走り切る』登山です。重いリュックを背負ったまま走らされては、子どもたちも疲れて嫌になってしまいます。

ここで大切なのは、ただスピードを上げるのではなく、ゴールに向かう「教え方そのものを見直すこと」なのです。

## 一人で悩むのをやめ、先生たちと一緒に取り組む

週1回の走って頂上へ向かう登山である補習校の指導を模索するなかで、私は自分の知識と「考える時間を確保する」という目標を自分に課し、ひとりで試行錯誤してきました。

補習校の先生方は、仕事などで忙しい中でも子どもたちのために熱心に教えてくれる素晴らしい人たちです。しかし、教育理論の専門家は多くありません。そのため、私が理論を使った教え方を試そうとしても、周りの先生方と共有できず、自分だけで抱え込んでしまうことがありました。

「専門知識を押し付けていると思われぬようにしよう」「ほかの先生のやり方に口を出さず、黙っていよう」――。いつのまにか私は自分の殻に閉じこもり、遠慮して発言しないようになっていました。

そんな状態が変わるきっかけとなったのが、教育プロジェクト「AG+」への参加でした。パソコンやITの分野でお手伝いしようと考えていた私に「あなたの専門知識を活かしてください」と言ってくださり、「評価法」の担当になりました。

改めて、「指導」だけでなく、「評価」することを見直すことで、わかっていたつもりの評価の重要性を再認識することができました。私自身、難しい言葉を使わずに、どうやって伝えていけばよいのか、考えなければならないという課題を持つことができました。また、情報交換会に参加することで、新しい情報を得る

だけでなく、補習校で働き始めた頃を思い出し、己を振り返る機会にもなり、先生方との交流の大切さを実感することができました。

## 「教えること」と「評価すること」をひとつにする工夫

補習校にはさまざまな背景を持つ子どもたちが集まっており、日本語の力や学力にも差があります。さらに時間が限られているため、日本の学校とまったく同じ評価を全て行うのは難しいのが現実です。

だからこそ必要なのは、決まった評価の基準をそのまま当てはめるのではなく、「クラスの様子をよく知る先生自身が、「1年

後」に目指す長い目を持った目標の基準（ループリック）を作る  
こと」です。

1～2 回説明を聞いただけで完全に理解できる子どもはめったに  
いません。特に時間が限られている環境では、形を変えて「何度  
も繰り返す」ことで身についていきます。そして、短い時間の中  
でどんな力を繰り返し育てればよいかをはっきりさせる道具が、  
授業とひとつになった評価基準（ループリック）でした。AG+の  
評価法部会に参加したからこそ見付けられたことでした。

一つの単元に一つのループリックではなく、数学の「問題を分けて  
考える」というループリックを何度も繰り返すことで、週に 1  
回だけであっても、「思考」が身につくきっかけになると確信す  
ることができました。なぜなら、同じループリックの型を 1 年間  
使い続けることで、子どもたちは単元が変わっても、新しいルー

ルを背負う必要がなくなるからです。走らざるをえない、登山であっても、この一貫したルーブリックがペースメーカーの役割を果たしてくれることでしょう。**AG+**はこれで最後ですが、このルーブリックを使ったアプローチを進化させていきたいと思っています。

時間がなくても工夫できる——人に教えるすべての人へ

**AG+**プロジェクトの最後の年に新しい評価の方法を実際の教室での実践、記録を取ることで、新たな課題と次の取り組みへのきっかけを得ることができました。

日本の教育理論や指導方法はとても素晴らしいものです。しかし、どれほど良い理論でも、そのままではうまくいかない「制限

のある現実」にぶつかったとき、私たちはどうすればよいでしょうか。

これは補習校だけの話ではありません。短い時間で成果が求められる会社での研修、オンラインでの学習、色々な背景を持つ人の学び直しなど、今の教える現場はどこも「時間の少なさ」や「受講者の多様さ」という課題を抱えています。

「時間がないから」「特別な環境だから」とあきらめるのではなく、目の前にいる生徒や学習者の状況に合わせて、教え方を工夫して作り直していくことが大切です。

**25 年の経験から学んだこの思いは、これから「人に教える」**

**「学びを支える」すべての人に伝えたい大切なメッセージです。**